
第57回保育環境セミナー 基調講演（チーム保育編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんおはようございます。今日1日座学ですがよろしく申し上げます。この会場は横に広いので、いっぺんに見えない。学校は一人の先生が話すために、全員の視野が入るように横の長さが決まっています、大体7mと言われていて、奥の方がマイクを使わないので肉声で聞こえるのが9mくらい。7m×9mが教室と決められています。逆を言えば教室は、一人の大人が全員に向かってみている。それを一番やりやすいやり方として作られているんですね。1人の先生が説明することを想定されていて、学校は特に大変なのが支援の子たちが最近多い。その中で飛び出したり、パニックの子がいても、加配が付かない。特殊学級のような、障害児学校があって行ってもらえなかったが、世界ではそれが批判されています。そういうところに行かせないで、一緒にするように言われていますが、なかなか難しいですね。私が以前小学校に務めたことがあるが、その時の同僚が定年で辞めたが、やめるきっかけが障害の子が多いと。1日その子についていたら、他の子の勉強が出来ない、授業が出来ない。保育園の時などは加配が必要だと要求をして見ていると、学校へ行って困る。実際そういう子が多くなっていますね。

—複数で見ることを考えるきっかけになった出来事—

教員の時に、ある子がお漏らしをした子がいて、私は小学生だし傷つけてはいけないと思って、そっと保健室へ連れて行った。他の子たちには、具合悪いから見てもらっていると行って部屋に戻ってきた。その子が私としてはいいの？と思ったが、みんなが心配していたが、その子は「具合が悪いのではなくて、お漏らししちゃったの」と言ったら、子どもなので、わー汚いと言っていたが、私は言わなくてもいいのにと思ったが、そのあと違う話になるがその時に、お漏らしをして保健室に連れて行く間、その間自習をしていますよね。私のころは40人から45人学級が多かったが、今では多すぎる。クラスが20人になったら待たせないでいいかですね。私からすると40人学級だったら、39人待たせるけど、20人学級だと19人待たせるだけのことで、待たせることには変わらないんですよ。その時に私は2人いたらいいのにと思った。一人が見ていて一人が連れていけるとして、その時に学級数を40人を20人にするなら、40人で二人の方がいいとその時思った。しかし教員たちは逆で、一人で全員を見るので、複数嫌がるんですね。特に気が合わないと嫌だと。教室は分かれていますので、戸を閉めて、何をしているか分からないが、好きなのか分からないが、40人だと大変なので20人という言い方をしていますが、一時期アメリカでは、チームティーチングと言って、複数の職員を置こうという動きがあったが、日本ではうまくいかなかった。一クラスを自分だけで見たいという思いが強い。私はみんなで子どもを見る考えが強いので、他の子たちと付き合ったときに、悪く言われましたね。先生の多くは、自分のクラスの子は自分の子のように思い通りやりたがる。そういうことで一つは教員を辞めたきっかけはそれもあった。私はクラスの子だけが自分の子だとは思えなかった。全校生徒が自分の子どもたちだと思っていた。せいがの森を開園したのが35年くらい前だが、開園式の時にしおりに集合写真があるがその下に、私は、世界の子どもたちの担任ですと書いて、昔からそういうイメージが強い。皆でみんなの子どもを見るという思いがあった。たまたまこういうことがありました。毎週日曜日は妻とウォーキングをしているが大磯へ行こうとなった。有名な政治家の別荘が並んでいて、いい庭園がある。最近焼失したけど復元された吉田茂の庭園があって、五十八（いそや）さんという人がいて、妻が好きでそこへも行った。

— 「21世紀型保育のススメ」出版時の取材—

昔、大磯の町立小学校を訪ねた時があって、その取材内容を探したらすぐに見つけて、世界文化社から出している21世紀型の保育のススメの4つ目の取材で、このテーマがチーム保育の考え方進め方です。これを出したのが2003年。今2023年なので20年前の本で、チーム保育をこの時に出しているんですね。こう書いてあります。昭和55年に旧中学の校舎を使用してこういう学校を作った。この頃にオープンスペースを取り入れた。オープンスペースの4教室分あり、教室間の壁は可動式。廊下側の壁も可動式になっているという学校です。チームティーチングが行われていて、その取材に行っていました。この本には、この学校の案内書にはチームティーチングを行うことが目的ではなくて、あくまでも子ども主体の学習や個人差に応じる学習を実践するための手段であると書いてあります。チーム保育をしたいからしたいのではなくて、子ども主体の保育をしようとする、個別差に応じるためにチームでやると学校要覧に書いてあるんですね。実践が異学年交流によりチームティーチング。1年生を迎える会で1年生の4クラスと2年生の4クラスが向き合っている。各クラスはそのあとの遊びのグループごとに向き合うようにします。このような時に教師は全体の指揮をする人、後ろから見守っている人、音響を管理する人というように役割を分担します。自分のクラスを担当するわけではありません。教師の加配がなく会を進行しようとするとき合同にすることによって、教師にチームが生まれるのです。普段何気なく行っていることでも意外と本来のチーム保育をしていることになるんですね、と私は書いています。当時、チーム保育を提案するとき、全員でやることで中々学校は加配がありませんので、こういうイベントをするときに役割が必要なので、チームで分担が出来るという言い方をしています。次の例と一緒に遊ぼうという会で、各クラス8グループに分かれて2年生が1年生を遊ぶスペースに連れていき、2年生の計画にのっとって1年生と遊んでいきます。遊ぶ場所が広範囲になるため教師は子どもを見守れるよう分担します。今度はエリアで分担をします。これも一つのチームの形です。必ずしも自分のクラスの子どもの遊びを見るわけではありません。この時も普段から他のクラスのことを把握していないとみることは出来ません。普段、自分のクラスの子どもの活動しかしていないと、いろいろな形態の活動はしにくくなりますと書いてあります。

— チームティーチングを行うポイント—

最後まとめがこの学校では、チームティーチングの行うポイント7つを挙げています。①学習指導要領の理解。②教員の意識改革。教師主導から子ども主体の活動。③教職員の共通理解。教育観、指導観など④学習環境の整備。内発的意欲を支えるための学習環境の用意。⑤学習材の準備。子どもの使う材の開発⑥情報交換の場の確保⑦子どもの育ちをみとる教師の眼力。これがチームティーチングに実践するためのポイントと書かれています。この時、取材に3か所行っているが、そのうちの1か所がこういう実践です。今読んでみると現在どう行われているのか、継承されているか分かりませんが、これ自体を読むと、これからの小学校の在り方がこう言われています。個別の学習指導、これは今度タブレットを使うことになる。教師主導から子ども主体に変えようというのも、新たな人材育成で考えられています。ティーチングからコーチングへ。子どもの学びの伴奏者であり、今の新しい学校の在り方として提案されていることです。ちょうど私が勧めていることと同じですと書いてあったのが、子どもの育ちをみとる眼力が必要になるということで、子どもを見ることが大事ということで、前に話したかもしれないが、チャットGPTが話題になって、いろいろできるようになっています。

— チャット GPT が答える「見守る保育」—

そのことについては後で話をするが、チャット GPT に藤森平司が提案する「見守る保育」がどういうものかと質問

した中で、よく言われるのが、見守る保育はどこまで見守って、どこから手を出したら分からないというが、チャット GPT では、見守る保育は、今までは大人が決めていたプログラムによって保育することから、子どもをよく観察をして、子どものニーズに沿ったプログラムを提供することと書いてあります。見守る保育は、そういうことなので、見るということは、子どもをよく観察すること。ニーズを探ることが見ることと書かれています。どこを見るかという、コミュニケーションの在り方、特性・表情から子どもをよく観察する。それに沿ってプログラムを作る。プログラムを作るときに同じプログラムが必要な子だけを集めると、年齢で集まるわけではないので、異年齢になる可能性があるので、異年齢児保育というのが私の提案するものなんですね。メリットはありますか？と聞いたら、1つ目が子どもたちの個性を尊重して成長を促進できる。2つ目が子どもたちの興味関心を引き出させる。3つ目が子どもの自主性や自己決定力を付ける。4つ目にメリットとして保育者の観察力や支援力が向上する。見守る保育では、子どもたちを徹底的に観察し、子どもたちに合わせた支援をすることが求められます。そのために保育者の観察力や支援力が向上し、より良い保育を提供することが出来るとチャット GPT が答えています。メリットの中には、保育者自身のスキルアップも答えていますが、まさにチーム保育の小学校でのポイントです。成功のポイントとして最後の項目ですね。子どもの育ちをみとる眼力がチーム保育には必要と書かれています。今の時代と同じことです。ある意味では 20 年前とあまり変わっていない。本を書いたのが 20 年前だが、こういう保育を自体を考えたのはもう少し前だが、今やっと来ているのかと思ったのが一昨年。保育用語辞典にチーム保育の項目に書かれているのが、幼稚園でチーム保育加算が付けられました。新人を採用したときにベテランを付ける。指導力不足もあるので、チームですること補助金を出す制度が出ていて、それについて解説がされています。途中から藤森が提案するチーム保育とは、はじめて辞典に載ることになりました。そこには藤森が提案するのは、一人の目で見ないで複数の目で支えるという観点からチームを組んでいると書かれ、新人にベテランを付けるのではなくて、複数の価値観から子どもを支えるということが載っていました。それがやっと 20 年以上経って、認知されてきたのかなと思う。

—最新の知見—

最近は何にいろいろな研究がコロナに影響して色々な研究があります。最初にいくつかの研究を紹介します。まず発達に対してですが、乳児の新しい知見で社会脳や 9 か月革命、社会的参照ということを知ったことがあります。社会脳は、ダンパーという人がそういう説を作ったが、私たちは集団で生活していますね。集団をつくる中で脳が大きくなったと言われていました。集団は一人より頭を使わないといけないし、ストレスもたまるし、思い通りにいかないから調整しないとけない。個人が集まった家族があり、家族が集まった社会の共同体があります。この 3 つを両立できるのは、人類だけだと言われていました。お互いに利益が反することがあるので、両立出来るのが人類だけ。両立するために脳が大きくなり、脳の大きさと集団の大きさが比例すると言われていたが、いわゆる社会脳という集団で生活するための脳ということですね。私たちの脳は、社会的適応をするために進化してきたということで、ダンパーは認知機能の観点から人の特徴づける要素として、他者の意図や心的状況を推測する能力、言語を挙げています。これらを進化の過程で獲得して、これらの認知能力を駆使して他者と関わり、現在の文化や社会的環境を作り上げてきたと出しています。あえて私が最近全国で講演で話しているのが、とくに保育園が中心だが、これから園がつぶれる可能性がある。一つは AI の進展もあります、少子化もあります。その他に私が危惧しているのが、子どもが少なくなると大人が多くなる仮説が分からないが、子どもは一人ひとり丁寧見た方が落ち着くと出ている。私は今言った社会脳の進化から反していることだと思っています。人類は集団だんだん大きくして社会の中で多くの人の中で育つ中で脳を大きくしてきたのが、一人ひとりが丁寧にやるのが落ち着くというのは、小学校で一人の担任の方がやりやす

いという大人主導の保育・教育大人がやりやすい。自分一人の方がやりやすいので、昔はそんなに人がつけられなかったが、最近人は人がつけられるようになってきたので、そういう理論が出てきている。一人ひとりを担当しようということ、私がよく言うのが人類は離乳という行為があります。これも珍しい行為です。大きく2つメリットがあると言われています。1つ目はお母さんは離乳することで生理が起き、次の子を産む準備が出来ると言われています。授乳中は基本的に生理が起きない。人間は早く離乳することで、次の子を産める年子という行為です。そうやって少子化を防いでいたと言われています。2つ目は離乳することで食事をお母さん以外があげられるということです。お父さんやおじいちゃん、おばあちゃん、近所人とかも赤ちゃんに食事をあげられることが離乳をするということです。

—共同保育—

人類は元から離乳後はいろいろな人に見てもらおうようにできているはずなんです。その中で社会脳という将来生きていくための脳が育てていく。その中で一つとった方法が共同保育という方法。私も昔はそんなに知らなかったが、京大の名和先生、元総長の山際先生が人類は昔は離乳後、赤ちゃんは一人では生きていけない。村で、共同体で共同保育をしていたと言いました、もう一度共同保育を見直しましょうという言い方をしています。共同保育を見直すというのはどういうことかということ、小さいうちはお母さんがいいではなくて、小さいうちから社会で育てていく時が必要ということなんです。それが最近色々な人が言い始めました。それは多く合意されていることですけど、共同保育をした時の大人の配置基準はどれくらいだったのだろうか？という風に思います。なぜかということ、共同保育の中で脳は作られていますから、人類はどういう遺伝子を持ってきたのだろうかということに配置基準を見た時に、こういう研究のデータはありません。狩猟採集民族を見る中で推測は出来ますが、そういうのを見る中ではっきりしたこの実証は分かりませんが、少なくともいわれるのが1対1や1対3のはずはないです。共同保育で大人がそばにいて子どもをこまめに見ていたはずがないです。それは狩猟採集民族を見れば分かります。多分子ども同士、特に異年齢で見合っていた気がします。今の一人ずつ大人が付くことで安定するという考え方は、母子関係では成り立ちますが、共同保育の中では成り立たないだろうと思いますね。私は多くの大学の先生は担当制ではないが、一人ずつを見ることで安定するというを多く出しています。出すことによって一人ひとりに相手にするなら親に帰すことということで、育休を取らせようと3歳まで政府は取らせようとしています。その中でもお母さんが負担が大きいので、お父さんにもとらせようとすごく動いています。しかし私は人類の進化からは逆行することだと思います。そこに子ども同士がないので、大人対子どもなので、子ども同士は保育園などしかないと思っています。昔は家庭の中では共同保育で見えていましたし、兄弟を下の子を見ることがありましたが、今は上の子が下の子を見せるとヤングケアラーとしてよくないという言い方をされます。しかし、人類は子ども同士の中で育ってきたらと想像できます。多くの方が共同保育を見直すべきだというなら、子ども同士の関わりを中心にして、大人も複数で関わるべきであるということを思います。また、トマセロが出した9ヶ月革命。2ヶ月から4ヶ月児は視点方向を中心にもものに注意を向けるようになる。6ヶ月から8ヶ月になると、安定した視線追従がおこなえるということを見つけた、これがちょうど離乳後。昔は大体8ヶ月くらいでしたので9ヶ月になると、人だけではなく、物を含む三項関係が成立する。そういう時期をトマセロは9ヶ月革命と名付けました。

—9ヶ月革命—

この頃に赤ちゃんは人の意図に接続して他者と共有することが出来る。お母さん以外の人の意図に接続して共有できるようになる。他者と注意を共有できるのが共同注意と言われています。これが出来る事でコミュニケーションやこ

とばの発達の基盤にできるということが1994年に提案されています。共同注意というのが社会的参照ということなのですが、こういう実験をしてみました。知らない人が喜んでいる顔と、悲しい顔が左右に並んでいます。そして声を同時に流します。赤ちゃんがどっちの顔をよく見るかの実験をすると、視覚と聴覚の情報が一致しているときに視覚刺激を長く注視する性質がある。喜んでいる声を聞くと喜んでいる顔を見る、悲しい声を聞くと悲しい顔を見ることが出来る。7ヶ月児は音声と感情を一致したのを見ると発見されたが、お母さんの表情と声は3ヶ月半で分かることが分かりました。身近な他者と関わることで徐々に発達します。1歳になると周りの養育者の表情を頼りにして色々な行動が出来るようになるということで、見慣れない環境は不安を生じさせるから、その時は笑顔で養育者が笑顔でいると環境が安全であるということを認識して歩みを進めると言われています。自分で体験できないときには、養育者の顔の表情を見られると言われています。言葉の発達ですが、今こう言う研究があります。言葉話すことは、口の動きを制御する能力と密接に関係しています。日本語も母音の5つの形があり、音を制御しているが、まず新生児はくしゃみなどの反射的な音を出すけど、これは音声と口の動きの対応関係の第一歩と考えられています。事実、泣き声の抑揚は、さまざまな音域で、泣き声が大きいということは、1歳半時点で話せる言葉が多いと言われています。音を習得するためには音声を真似する。それは新生児から真似をするときに口を制御するので、口の形と同じ形にするところから始めます。それが新生児模倣という音声模倣ですね。生後7日でさえ、聴覚刺激に対する音声模倣はできる。「あ」「ん」を7日から分かる。口の動きだけを見せる場合と、口と音声を一致するときだけ真似をする。3ヶ月児で母音の「あいう」というのを真似をすると発見されています。3ヶ月から5ヶ月児は、口の動きの運動能力が活発によってあ・い・うを明確に区別できると言われています。音は聴覚情報のみではなくて、口元を見ることで補っている。一時期いろいろ議論が起きたマスクをして赤ちゃんに接することは、音声しか聞いていないので、これによると言語発達はしていかない。口元と音声不一致といけないと言っています。喃語期の赤ちゃんは、話者の話し手の口元に注目を向けることで、言葉を口角的に獲得的するとされています。6ヶ月の時に母親や話者の口元を見た赤ちゃんは、24ヶ月の理解や算出する言葉の数が多かったと言っています。私たちのグループは幼稚園が少ないが、幼稚園の先生に話を聞くと、3歳から入る子たちは7、8割言語発達が遅れていてまだ話せない子が多いと聞きます。お母さんだけ、マスク越しだと発達してきていないことが分かって来ています。これが一生に関わります。マスクをしていないことでコロナに感染すると言っても、赤ちゃんは感染しても1、2日で終わっていたものが、マスクをすることで一生関わる言語発達が遅れていいのかと思ってしまった。その頃はまだコロナが分からなかったが、この辺りの言語発達にどれだけということがあるので、色々な人に関わることで共感が付いてくるし、共感が付いてくると言われています。違う説で言われているのがアロマザリング。これは母親の負担をシェアするための、赤ちゃんが持っている能力です。お母さん以外の人と関係を結ぶことの能力です。

—アロマザリング—

これが保育園が成り立つ一つの理由です。お母さん以外の人でも大丈夫ということで、アロマザリングの考え方をもう一度見直すべきであると言われ始めています。いろいろな人の中で、子育てをされるべきであるというのがひとつあります。コロナの間に人に会わないことが問題になり始めています。コミュニケーション能力の問題でもあるんですけど、色々な人に接しないことによって、コミュニケーション能力を含め、発達が遅れていることがあるが、もう一つ口元を見ることに関してだが、不登校の子たちが増えて来ていて、色々な思いがあって学校にいけない子たちもいるが、コロナによって学校は必ずしも行かなくてもいいのではないかと、親たちも思い始めている人が多いです。行きたくなければ、いかないということがあって、休んでもリモートで授業を受けられ有難い時代ではあるが、そう

いうことでいろいろな理由で増えています。問題は不登校になった子のケアをしないといけないが、何でそんなに増えているのか。将来社会に出た時にどうするのかということがあります。人類は元々集団の中で生きていく生き物なのに、どういう意味があるのか。コロナをきっかけに研究がされています。リモートの会話はどういう影響をしているのか。それを研究しているのが東北大学の先生が研究したことだが、オンラインのコミュニケーションでは感情の共有は難しいことが分かりました。情報だけが交換されていて、感情や共感は伝わっていないことが分かりました。言葉だけのやり取りは可能ですが、それ以外の間はコミュニケーションを付けないといけない。名和先生は人間が喜びを感じる重要な要素があります。それは感情のコミュニケーション能力。言葉のやり取りもあるが、感情のコミュニケーションもあると言います。(次号に続く)

本稿は、2023年11月14日に開催した「第57回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)